

スペイン文学における問題点のとりえ方を教えていると思える本書が多くの研究者の目にふれることを望みたい。

なお、著者はシワシントン大学のローマンス語の教授でペレス・ガルドスやピオ・パローハの研究者でもある。(大島 正)

(Sherman H. Eoff: *The modern spanish novel*, New York University Press 1961, \$ 6.00)

学会記録

日本イスパニア語学会の活動(2)

第七回大会(南山大学 名古屋 昭和36年10月12日) (1961)

研究発表要旨

1. スペイン語半母音の音素論的解釈について

東京外国語大学 原 誠

Bowen-Stockwell は、/i, u/ を syllabic にしか認めず、non-syllabic な場合はすべてこれを /y, w/ に帰した。また Alarcos Llorach は /y, w/ を #SV または VSV における S の環境にのみ限定した。しかし私見によれば音素 /y, w/ を立てることは不要と思われるので、その理由を主として前二者への反論の形で述べる。

2. イスパニヤ語の動詞活用

早稲田大学 島 岡 茂

イスパニヤ語の動詞活用形を、語尾、語幹の双方から考察すると、文法カテゴリーに応じて大体三つの枠に分けることができる。次にふつう六十余に分けられる不規則動詞の形を、その不規則性に応じて整理すれば約二十余に分類できる。これらの方法をフランス語などの場合と比較しながら説明する。

3. 名詞のスタイルとしての冠詞

拓殖大学 瓜 谷 良 平

冠詞に関する文法上の諸学説によってもうずめることのできない隙間がかなりの面積にわたって存在し、この隙間の説明には文体論に逃げこむしか方法は見出されないことは現代ヨーロッパ各国語ともに常識のようであるが、スペイン語ではどうかという問題、および日本語に存在しない冠詞を、意味とか機能とかいった面からではなく、文体論的に、日本語に於ける接頭辞「お」との類似点の比較対照を試みた。

4. ルイス・デ・アラルコンの特殊性について

東京外国語大学 会 田 山

黄金世紀のスペインの劇作家の諸巨匠の中で、アラルコンだけが極めて特異な存在だということは誰しもが知っていることだ。モンタルバンが *Extrañeza* と指摘していることでも、同時代の人々さえこれを認めていたことが分る。彼の代表作《疑わしい真実》を中心に、この特異性の由って来たる原因までさかのぼって述べる。

後記

第6号に比較して、原稿の集まりが悪く、編集に困ったが、いい資料が辻井氏から寄せられ、なんとか第7号ができた。

東京、関西双方の編集委員が協議し、意見をもちよれるかっこうになったことも、よかったと思う。

印刷代の値上がりのため、6号より頁数を減らさねばならなかった。第8号からは小さいながらも、びりっとした学会誌に育てたいものである。(編集委員会)